

弦本拾遺信長記

前編

四

特別

13

2507

4



門 遠
號 2507
卷 23-4

繪本拾遺信長記初篇卷之四

目錄

信長勢州發向之事

門後乃一揆信長の本陣と疾討

信長南カ上覽

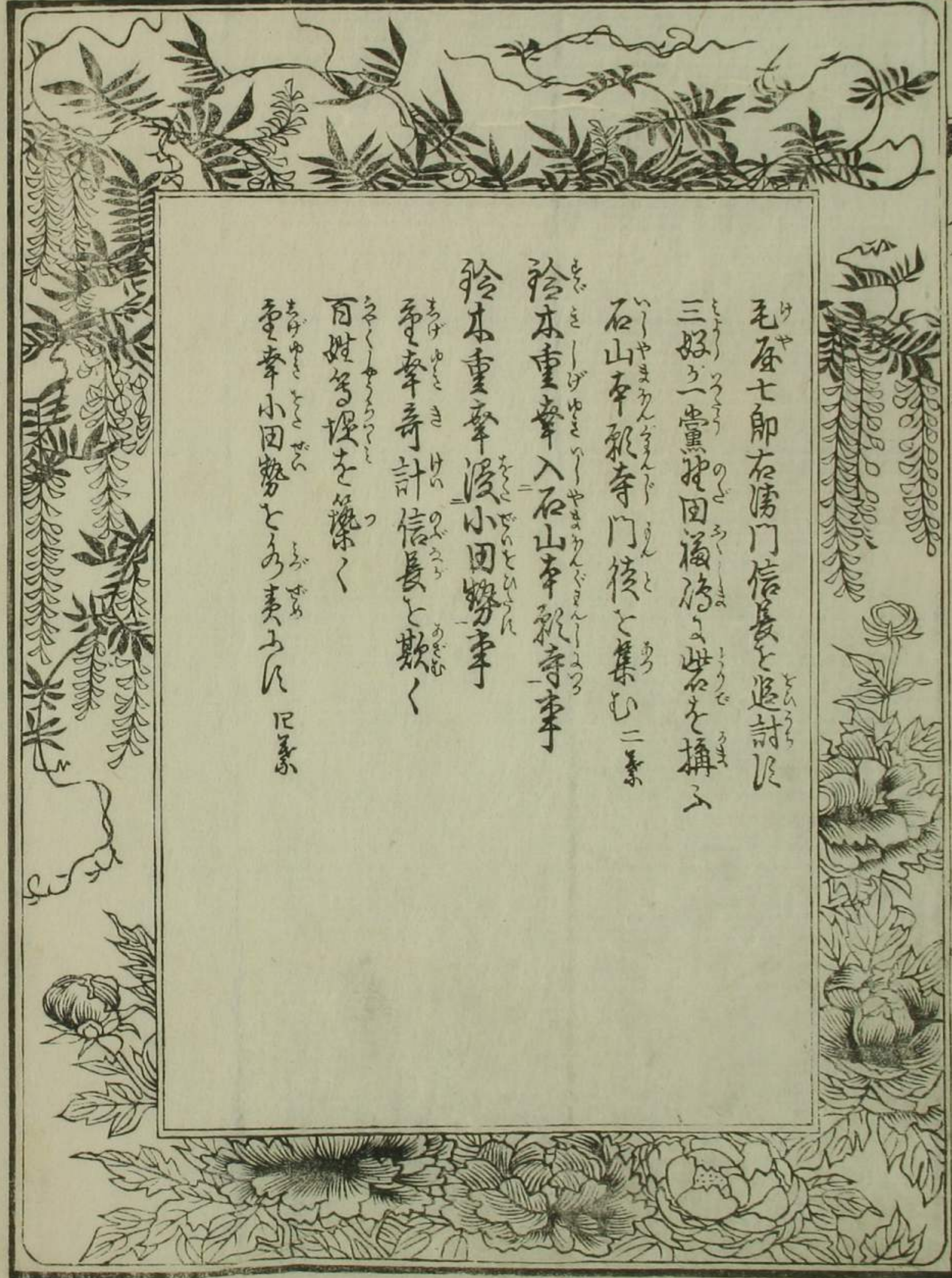
信長城元攻朝倉本陣

信長滋清の爲首と建

信長女背が峯乃城を夷

信長攝州發向之事

繪本拾遺信長記初篇卷之四



毛登七郎右衛門信長と退討に
 三好三黨押回後河内諸將を揃ふ
 石山本願寺門後と集む二業
 珍本重幸入石山本願寺事
 珍本重幸渡小田勢事
 重幸奇計信長と欺く
 百姓多塚を築く
 重幸小田勢とあまふに 已兼

繪本拾遺信長記初篇卷之四

信長勢州赴向之事

永禄十年秋八月信長伴勢國司小畠一家と征伐せんと受徳
 尾張の軍勢万余騎を引率し國司の本城大河内へ押寄せ八方ふ
 奏よせ息をせ絶せし美三ヶ所城中也家と全度と防ぎ我
 らぞ小元より堅固の要害に兵糧玉系十分と作りしが八月
 より十月のまゝ二十余日及びとも又も居城とんぎ侍りて
 小田勢美河内とぞ月々より家々小畠の旗に八回乃城を
 楠七郎右衛門尉正具とらる者あり後醍醐天皇の忠臣楠河内
 判官正成が後胤にして智勇備へし武士たりたる永禄八年信長
 勢州赴向せし時正具謀計を以て信長を本國へ退し今度國



西不吉美巴刀家



門後の一揆 信長の御旗と夜討に



司の居城大河内と表らるる急ろの心かきくぐれがわけて、勢州信
 長がふふ奪るべし計略をひそくあひを切崩し敵の英氣と挫く
 べしとて、仍て撰州石山本野寺於如上人の撤文をじら(勢州
 一國其外近國の門後ハ余人をあつひお國を定め、信長が
 本陣へ疾討し、ろふ小回方おひすろろのるれば討る若敷と知
 らば、柴田佐久間お計多森が軍死にぬく防ぎ、戦ひ辛しして
 門後等が追をりどけるが、け時大河内の城より討て出探合し
 て、戦ひぬ、信長故軍とぬり、勢州又是の止るまじき、小留一家の
 ぬ士等軍より拙くお詠め居り、るれば、信長再陣脚と踏とぬ
 小留の懸兵も、らるるのじとて、小田掃部ぬをひて、暖と云入
 終に和睦努ひ、信長が次男茶茶丸をひて、小留の忠告よりぬ

十月廿二日軍勢とまどめ本國へ帰陣せらる、其路小留の城と
 る小門後の一揆等二万余り、掃籠り、換炮をおけ、矢と射ぬ、
 支へろ、小信長大き怒り、是皆本野寺の如、ぬが、お知とるふこと
 後の足懸、ぬけ城を踏く、一人ぬ、ぬ斬とて、よと自ら馬と共
 先ぬ物、をちくと、お知せらる、ぬは、柴田應惠多、久間お計多
 の面、我おと、しと、美討を、お、い、う、ろ、毛と、防、ぐ、ぬ、た、追、る、搦、の
 一時、又、美、破、ら、ぬ、進、ろ、小、路、ろ、く、防、ぐ、ぬ、ぬ、術、を、ぬ、ぬ、表、ぬ、し、一、城
 の門後、二万余人、悉斬殺、ろ、信長故と、執ひ、軍勢と、率て、故、阜
 乃城へ、ぬ、ら、れ、ろ、ろ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、八、回、乃、城、を、捕、七、郎、左、衛、門、尉、正、具、の
 信長の、悪、と、海、く、ぬ、ぬ、家、と、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、き、体、と、ぬ、ぬ、私、ぬ、書、ぬ、と
 引、ぬ、石、山、本、野、寺、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、上、人、の、所、并、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、後、一、箇



信長
角力
上巻

画本信長記初巻四

の末寺とらへし三番定専坊とて今日に於ては信長
 棟が中親寺へ移りしとていふに於て人と眼を急軍
 兵をさしむけおとさんと知せられたるは田お計多明智
 多とてしむけの面く種くといふとては國後向の役にお止
 るけりし付くは如上人の更なるおなれりしとて信長
 深く憐れ終に十余年の合戦ありたる實に不承ありき

信長誠意攻朝倉事

永祿十三年年号改元ありて元龜と号し今年去二月小
 田弾正忠信長諸國の御款退治せらるべき懼しむるに軍家
 の台命と申す人々も御上落ありしとて近に國忠樂寺とて
 不承ありしとて御中より名をさるるに南力のとるる集り御

御定のありしお撲真妙の事とていふに御撲は百海寺の麻
 呂居眼右唐門大唐の正權河原寺の大進とては成慶しては
 中より総又一郎とて人々お撲つけて三度勝りたる信長
 真入り焼栗二ツありて獲てせしむる信長性質悟悟
 の人々を他人よりは物とていふる人々は三月三日信長
 系着ありて典藥院隠居が宅と申すに定めしとて近國の
 大小名引きしに群衆は月朝日永州櫻の町人等お持せり
 の名義と持せしむる信長の御款は信長先年の御款は
 て何とていふとていふとていふ中より秀逸なりしとて
 天王寺屋敷久々呂記の葉子の信長師院の小松崎の水指御
 岩松が掛子口の葉入あり信長是等の名義とていふとて



西行法師の御影



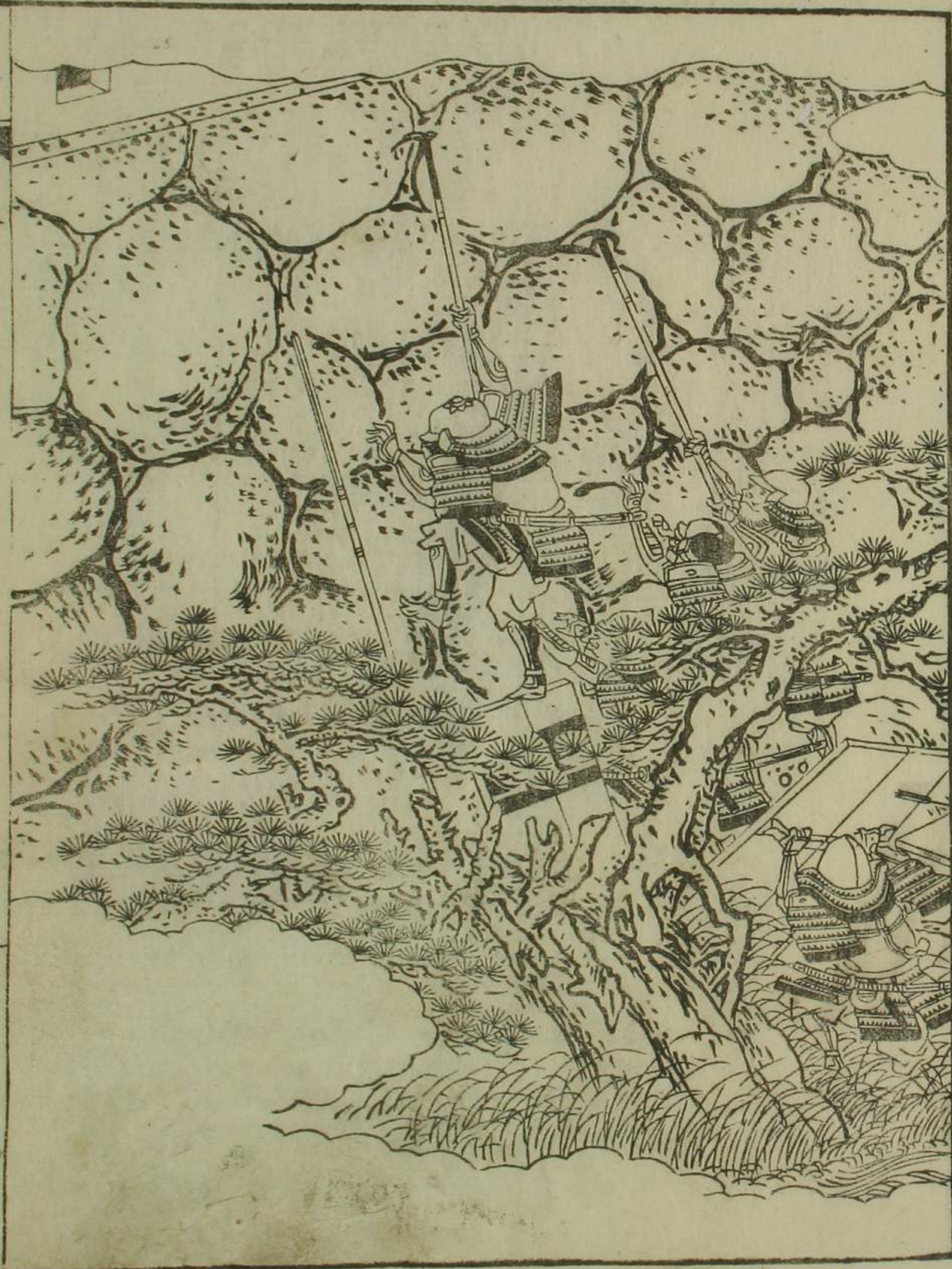
信長
継子の
為首と
建る

西行法師の御影

信長下野守久政其子依元守長政等忽り信長又叛き朝倉
 又合伴し後より迫て信長と狭し討んと討るは退りし後
 進引しきし信長大き小勢き浪舟又子我政治と塞ぎ朝倉の
 前より痛く戦ひ我進退を失ふ不之不詮ゆるきと打ち討
 死に覚悟志を傳へ戦ふ斬入り我存を危むと諸軍と下
 知し進んと浪家老宋田捨六郎勝家是をいさめて中なるを
 浪舟のりは是も浪舟又日暮の夕迄と見る小を討り
 又き勇士又もつらに君速う小引え終りいまだ浪舟の人殺り
 せぬとていぬおのり地を河引とらひ死しとち又依信長
 實もと必し子も軍勢をまとも退陣及びひく朝倉勢退討
 又折てうらば申しき難儀なるべし今度の後殿こそ大に
 誰う是と勅ひきやと側をき門と見終るよ本下後吉郎とて出
 某の勢をみて種ヶ崎の塔又捕籠り朝倉勢何万騎退来りし一
 只も進ませたけ不に喚止りて間御心安く引させしと云ふと
 信長大き小歎ひ終ひ宋田勝家を先陣とてませ京都して
 引えたる小本下は浪舟又子我政治より門と本親守門後等
 一揆と後し信長が政路瓜をうり依掃より杉本城の山中
 と種々美らく系着る叔と本下後吉郎の七百餘騎を種々
 崎又築城し退来りて款を待居る小按又遠り朝倉の勇臣毛
 屋七郎左衛門といふ者にも子の軍兵を引率し松と志とて妙
 うけしよ本下後吉郎城中より討て出旗炮を飛し矢と討り
 け度と詮度と戦ひ勝負のまじりてに俄又後のふりよ又

誰う是と勅ひきやと側をき門と見終るよ本下後吉郎とて出
 某の勢をみて種ヶ崎の塔又捕籠り朝倉勢何万騎退来りし一
 只も進ませたけ不に喚止りて間御心安く引させしと云ふと
 信長大き小歎ひ終ひ宋田勝家を先陣とてませ京都して
 引えたる小本下は浪舟又子我政治より門と本親守門後等
 一揆と後し信長が政路瓜をうり依掃より杉本城の山中
 と種々美らく系着る叔と本下後吉郎の七百餘騎を種々
 崎又築城し退来りて款を待居る小按又遠り朝倉の勇臣毛
 屋七郎左衛門といふ者にも子の軍兵を引率し松と志とて妙
 うけしよ本下後吉郎城中より討て出旗炮を飛し矢と討り
 け度と詮度と戦ひ勝負のまじりてに俄又後のふりよ又

日本書紀卷之四十四



信長
出陣
旗を
立て



岡を仰り教百流の薙刀を翻り朝倉勢の後を先切人ありさま小
 見久らるる毛屋七九湯門大さ小勢さ敵又後と包まきさくの時ふ
 ほじと馬と返しく退くやふ朝倉勢の侍人忽亂し我克又逃
 仍々瓜本下秀右余氏はしと追討く討兵首二百余級うか
 抄いせそとく追捨はして再び城又築りて是の秀右の良
 等朝倉兵清堀尾辰辰余余命し道辺のらく又埋伏紙懸と物
 く岡を仰り奇兵の術とるじゆるが深しく朝倉勢教亂て
 故小せり秀右れし下地しく其後いらくおくよを冊を焚せ
 ねくい狼烟と揚げさまぐよ奇兵をなせ朝倉勢心疑ひ敢
 て進んとふ若くかくれし日教に日とてさくやふ今ふ
 信長系都近く凱陣し終やうんいと歎たまきれて引去と

諸方の冊火を焚とくはしゆらぐと引拂ひて瓜又と進者ら
 うりうりけ耐秀右後殿を仕換じる信長も危うゆらふ小勇
 畧備し秀右らと諸人こそ門く称意し多け耐れよ信長
 攻法瓜本教寺の門後多ふ交へられ眼を懐るる大方り瓜
 よは本教寺と妻崩さんものと密に計略とらぐさるる

信長撰州教向之幸

又三好の一黨い去年本國寺乃合戦又打負阿波國又引退
 が再び討てとりけ恥辱とぞんそく其降後及ひるがさう
 撰州中島の地野田後橋又要害のは瓜構一味方の足場り
 信長を抄びきゆり勝負を交はしとく三好山城入道笑居
 毎日日向入道小毎月中野守岩成之礼女をばじゆ一族良後に團

毛原
七郎在瀧門
信長
と
追討
以

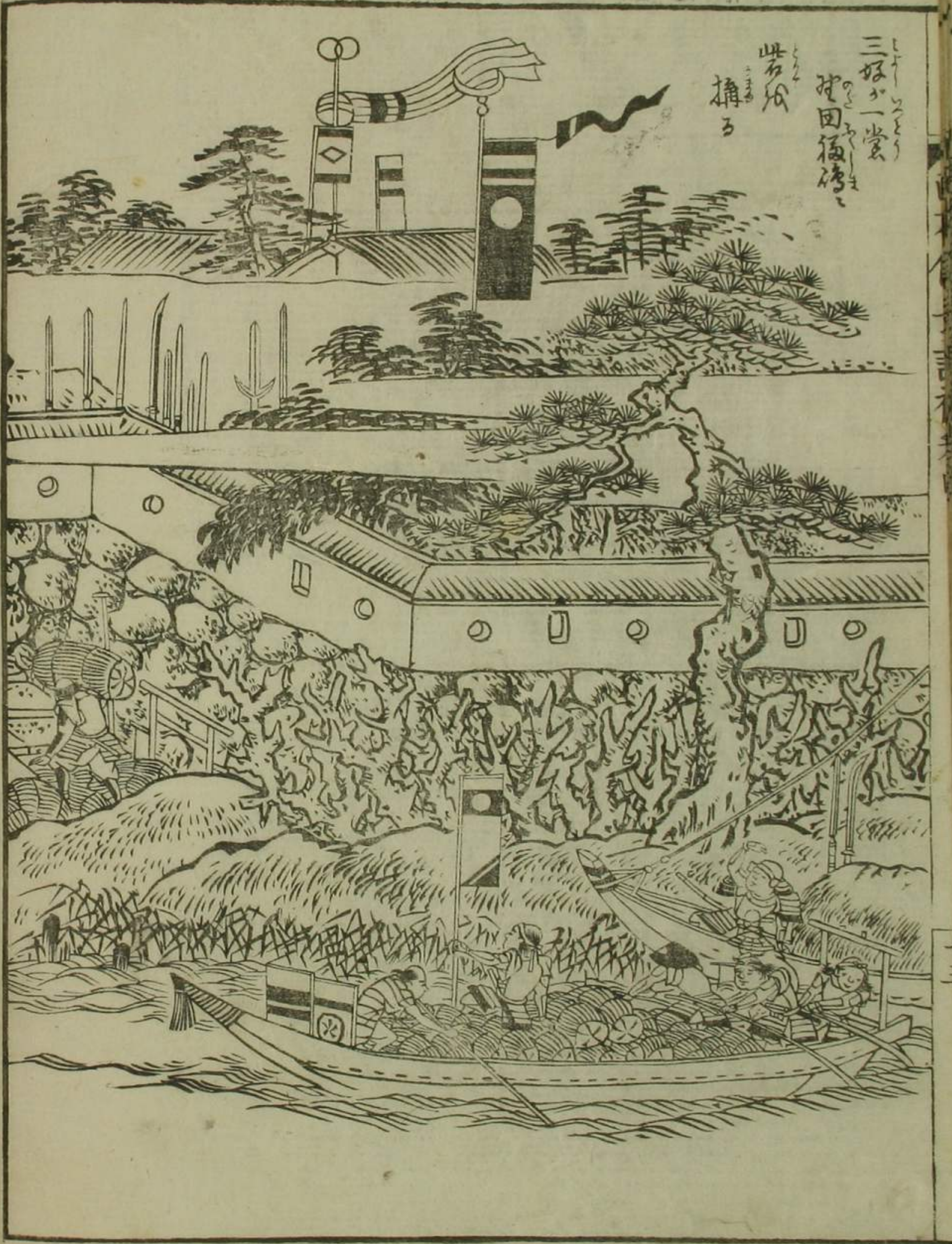


画本信長言初巻四

の軍兵都合一万三千余騎元龜元年秋七月摂州へ押入り天満
の森に陣をえ押入福徳寺に陣を据まじし堀とけ矢倉とこげ丸
楯逆本を引て楯籠る是より門を津國の證劔大方向に引馬
を引て信長へ進軍するに楯の圍を引がじし信長より摂州へ
出馬し懇款征伐と云き之より兵隊尾張兵勢三河を以の軍勢
を備へ同年八月下旬津國へ發向ありて中陣と天王寺と居らる
是に先きの軍兵は後田津村津崎と難波下難波本津今宮と先
置せり叔父信長の御方より武士の畠山次郎等三好元系
と義次松永弾正久秀和同修賢守本元守池田徳後等
丹兵衛辰川伯耆守と物と「務殿着別」御勢六万余騎
とて安らる何とまけ大軍押入福徳寺と名圍んで煮るものなり

三好一族粉のどく如りなりと恐怖の色をば「る種」後徳寺に
のりたる難大なる三好の三番西城後守城を逃さ出く信長
又陣を九月七日信長天王寺を立く中津天満森へ陣と
つさ川分口より向城を築き平に置物依り内蔵女塚中
小大膳依り九勝門等三百人を以て是と守らせ石山より
十余町西の方籠岸より石をくまみ毎夜新入即中川
八郎右衛門頼義守より二百人を若尾孫次郎にむ是を
中津寺より三好の力を合せんく石山と押入乃おのれは
石山十分と調ひしうきし押入福徳寺をせし埋まを以て其
堀と埋せ中津川より船橋を渡し是より孫次郎と附け
透向く「浩」せしや鉄炮軍とせしつる由月十二日新入軍と

日本書紀卷之四十四



三好一室
理田福徳
此所
捕る

御出陣はしつ浦にらふ石の古城に入御し移しけ城の御多亭
 福の比細川を圍築き播磨一族細川晴元と合戦し終り打ちけ
 落多しりし不吉の古城をせしむる三好の若しも叔味方勝利と
 得んり疑ひはし浦口の城を築置し若の軍を勝し例をせし味
 方の若もくはしつ浦にらふ石の古城に入御し移しけ城の御多亭
 と押寄せ不くは井橋と組と其上より大筒の鉄炮を射つけ城中
 へお母ら及び移置砲煙室を築き其鳴若り百雷子電の落るる
 がごとく城中に傷の若敷を射つけけ城日たつて落るるの
 と危きものぞりしにけし信長心中又謀計をめぐりし理田福徳
 の城を屠り或は石山本願寺と美濃日比勝しと云ふ坊首と
 見んものゝ密くは其用をを知らせらるる小田勢の中、親雲

宗信心の若敷多ありてそしが中よりけりを石山へ告知せしむ
 む上人をせしめ寺中の面々大木小移き叔味本願寺門を壘
 が先見し遠り信長理田福徳と美濃勢ひは系して出陣寺
 を夷んとし法飲用をりてけしはしつ浦にらふ石の古城に入御し
 の門下とせしむ十二日の夜中よりけりを石山へ告知せしむ
 近在近郷の門後を集めたる後といや石山の御大筒の御多亭
 及びこそあれ遠國近國の末寺の坊首門系の播磨引きては
 馳集り既其勢二万余人に方の門を圍め矢倉を揚げ柵を
 りり大小の鉄炮を備置ししと云ふ今又信長よせ来りて
 佛恩報謝と命と抛ち弥陀の利益を改めしむき徹夜はして
 捨らんものと斥咄を舌で待りけり

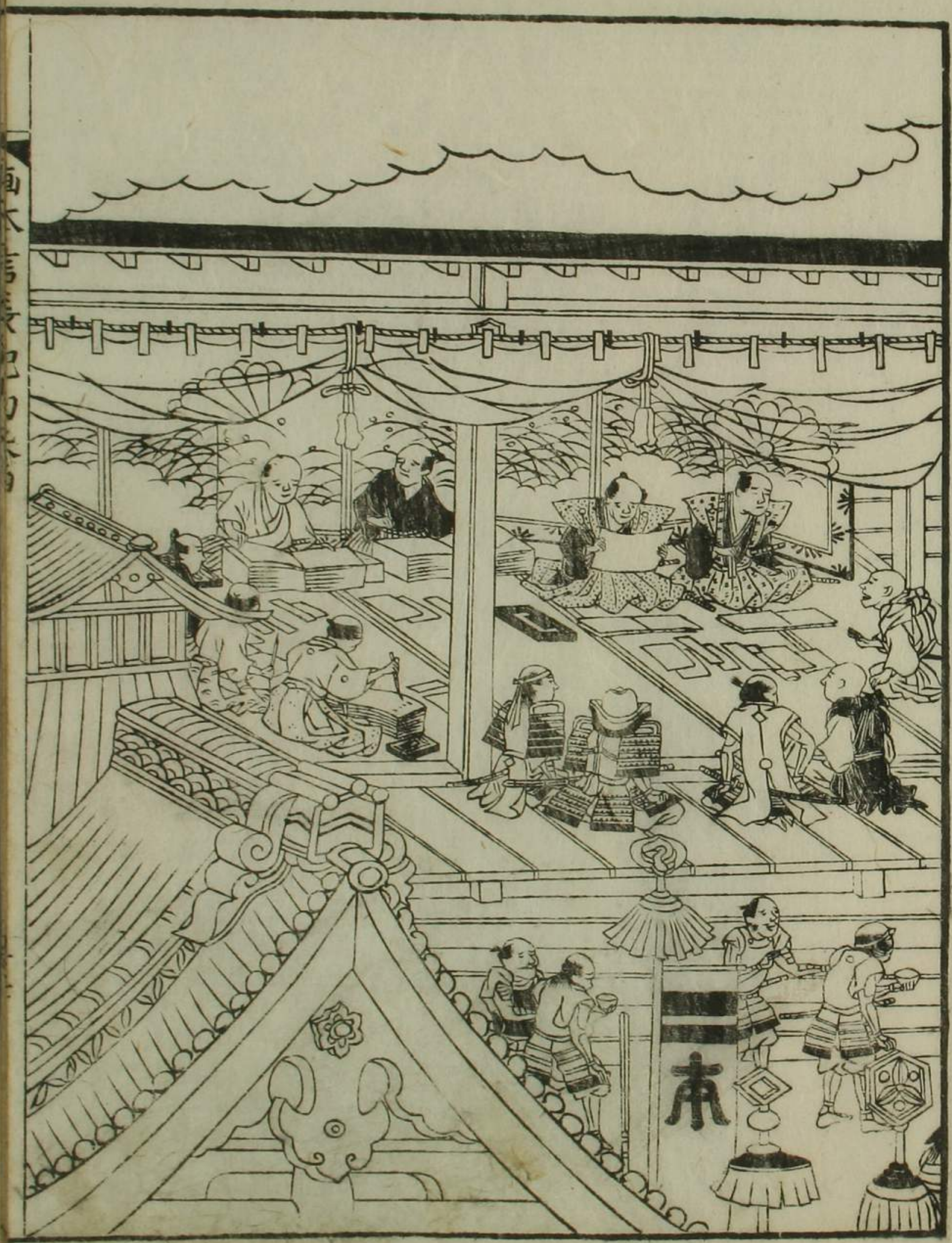


画本信長記初巻四

石山本願寺

門後と

集り



鈴木重幸入石山本願寺事

け附於如上人家老下間頼藤曰少進等とて宣ふ申うの今中
 二集勢城 人数五人権勢不を都て城と唱へ入る 門後の軍勢六方入余り
 とつとも或は坊主或は百姓武士の浪人など其少し然るは
 の大おの忠附天下の別おと称せしるは勇名海内は鳴る小田
 信長歎ええて防戦るさんり 是來は「紀州の鈴木源右衛門重
 幸の兵畧軍法智謀計策を兼備」忠附不取乃勇士之渠と石
 きく軍師と称さば進退若くは法則は叶ひりるき級軍のあはる
 比汝等勞と稱せば「南紀は坂さやくを要をば」兼く
 我心を安うしめよと物々しは皆懐く令養民中は下間少進
 とくこ出某附使として彼不より重幸と誘ひ海内」とりけ

是はと人歎ひもつる書籍を授けらる人少進を懐は「後
 僕後三人を引給」紀州有田郡反白山の林森鈴木重幸が菴は別々
 と人の書籍を附属「事の子細を審み物語り表は佛歎退治の
 為の寺あり士卒と指揮しと人の一臂を助け給る何の喜び
 う是又如人と礼を盡しお演るる重幸守てヤクらの今度の一
 めこそ京門の真色よわりの名上人一世の御たることをなてし人
 上人の御下に陸の某入寺致し「うりとも愚昧の小民軍配なき士
 卒と知せんや受承るは冠のむしりかゝる幽僻乃
 地より引致てのそ我をよ人懐く遠く物の用は立はじくはさり
 らぐり強て群退仕るし命令の情きよ々と忠さよえし口をり
 先祖の名も恥しくは物々し陸の勢城はるべきとてい言

多小下間少進大木小執比美殿新城ありて軍配と司り給
つ小田の別款も賜りて又是より上人定めて待まびてこそ扱
とらんあしお立給へし其御伏仕比しとやらん其奉
何系逐系仕り人き出國又某二族三入人より是とも懼
百を以て入城と比し是下先攻城ありてけ頼きとと人よ云と
あふし下間少進又抄ひて奉奉が入城の時日を治し
まど若く石に御りたる奉奉が一族鈴木源市とらふ者
あり武勇絶倫の者なりらん出國難かすは武士等又百餘
人を集めて援を以て勢いと震ひたる奉奉を奉奉の御方
又系りは告つりらん源市被り百餘人の一援と引給へる白
山は奉門より奉奉に吹ひぬ奉奉を奉奉に執ひ其外の一族は

志摩与に即去掃平次河橋ありて天原吉茂鈴木一掃等を
比し茅葺と出て日月十二日石山本教寺より奉奉は

鈴木重幸没小田勢事

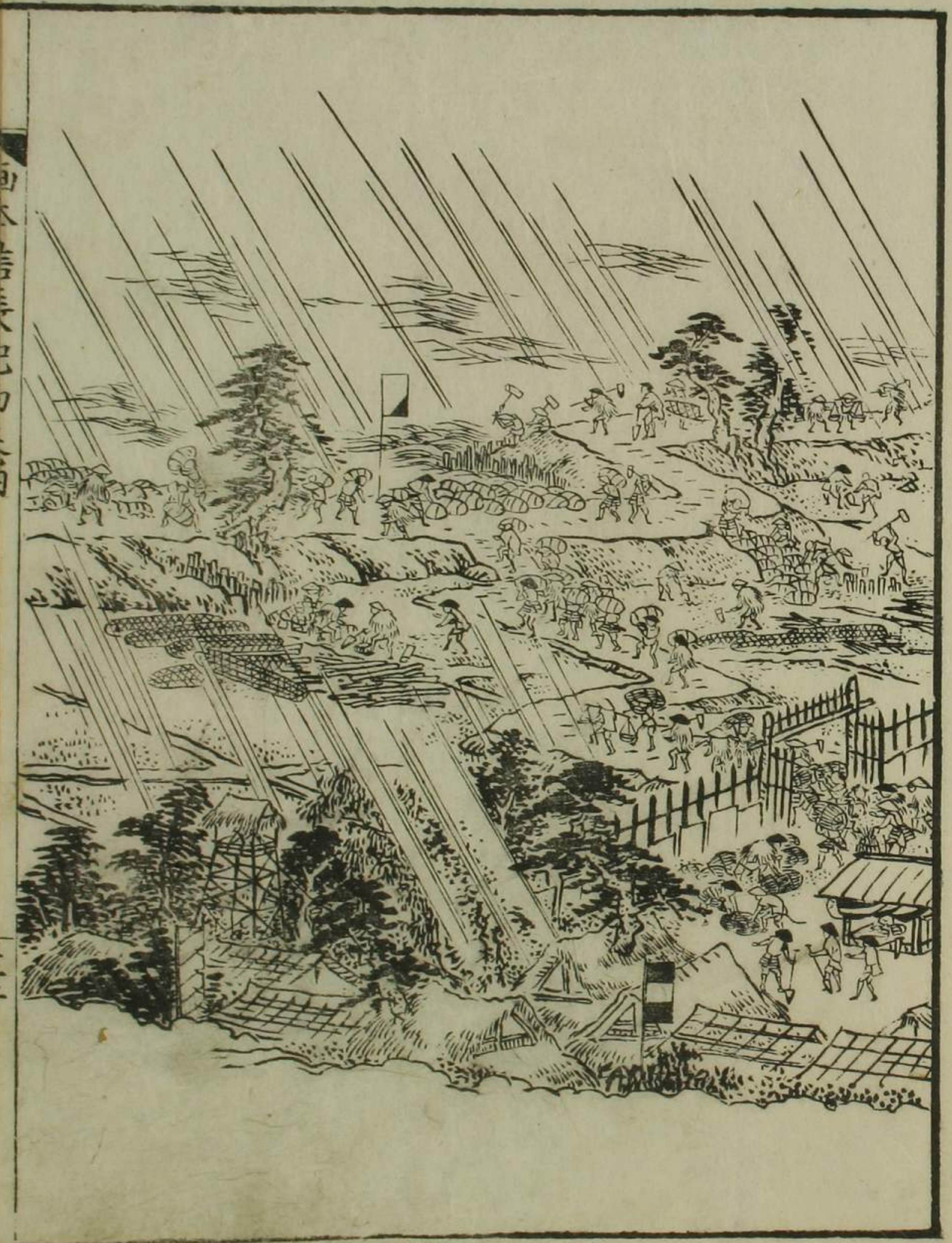
去後小田の大軍押田福橋の新城を十重二十重五圍と只二附
系崩さんと屋敷をまうたに奉奉よりたる御る小け以雲林雨日と重
く降つぎ川へのあり岸よりるく小田の陣と候へらんは士率
命じて去儀をかきと境を築洪水の傍へ又志づりて合戦もお止
雨のちりてを待居らるは附石山本教寺は鈴木重幸入寺也
かば上人をばじり奉奉とせ一山の門徒等いさゝかあはし信長
が軍勢衰へせよし花く奉軍しと東國武士の眼をさまき見
と腕と扱てためらひりり時より奉奉上人の御前には出で云上し



多のけ後より目を奪ひ大兩降つて小田三好の兩軍合戦と止て
 雨の晴間を以合せ以元来信長が天満森の陣に地形ひき
 てあるあり速惑と云はけ耐の原に其計をめぐり小田の大軍を
 泥めを奪せ信長が譎候を以挫ぐ也」と申つると工人止て宣ふ
 信長軍兵と出押せ奉る止り防ぎ支由べしは方より
 兵を以向け敵を謀り討んり我奴まざるを之軍師志づり付日
 を見合せ信長が奏るを待て計策と能し終人重幸謀てや々の
 上人の信信よみ難く是へりいどもまい其事平和なるもの
 のやそい兵い元より偽道よ不意よりどんが勝り離し勝り
 を求めざらんは合戦を止る降参する小志くわくは信長暴逆
 不道はして我軍門の怒敵なり工人と扱て渠が考ると待たま

りん京命退將せる我初小田より佛敵法敵乃信長と討てさ河の
 陣よりんと云と云しくお述は上人其理又依り終ひさういをり
 よし軍師の計議又まうせ終人と信々しり事幸甚の摂州の門後
 の内より百艘むりり又百人あゝと物酒肴菓子の敷を夥しく
 持せ委しく計と押へ信長が陣へ遣し又兵船二十余艘又鉄炮數
 百挺を圍居し船毎に大砲一人士卒又十人と係し其計略を以會
 て候入くお戻し其大砲の誰くをや冷本孫市志摩與田即地
 里三右衛門及舟を即右衛門今舟控七の又人之務く事幸が押へ
 を令儀しとひくは出まらけ耐小田の陣中へは降候三よ敵
 霖雨は浩めを防ぐ用意の外何ものも無り退屈してあり
 たる彼等執事門後乃百姓信長の陣不あり我の近道

画本信長記初巻四



日本書紀卷之四

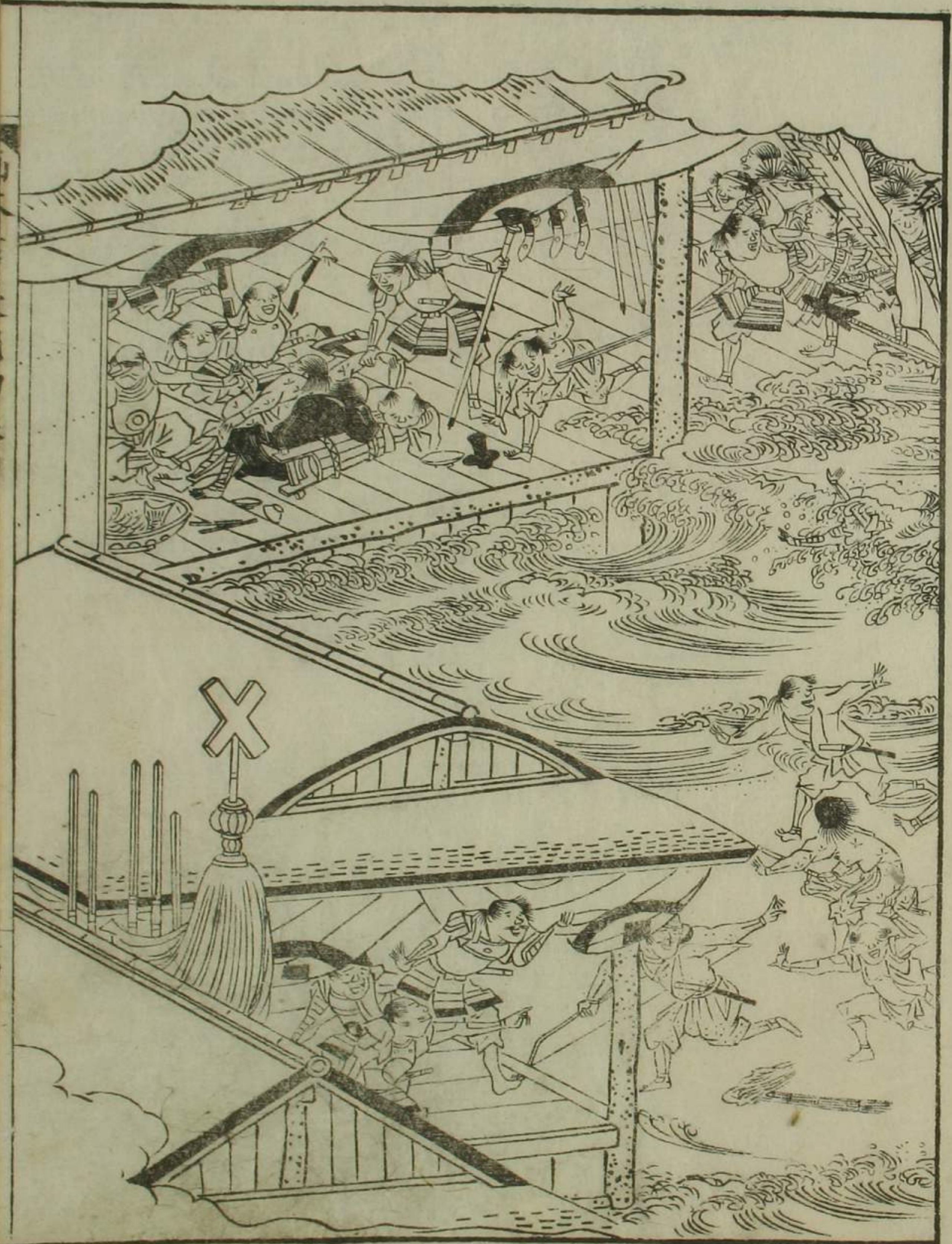


百姓等
境を
築く

日本書紀卷之四

村の百姓もその近身三好多礼を殺し津國一國合戦の街も有り
 耕作と妨げらるる田畑と踏荒され殆ど惑團窮乏に信長
 公の武威を以て三好三好の滅亡を遂げんとす百姓一統小田の市仁
 徳と歎び市代長久万々威を望しなり市陣見棄れんとて困乏
 せし酒肴菓子惣菓の類と歎び「多礼信長を恨みたりや」百姓
 性どもと目録りへ拓き汝等が系勅こそ滅びてお持たれぬて
 天下と平均し安樂な農業後世致とぞ歎て退出せよとて喪
 災の名目着于賜りぬと百姓等もと涙と流し「多難さよ」市陣中
 と市前退き出らるる陣中へは洪あゝと防人ともく去儀を焼り
 焼と薬き土率等周々罵り走めらるる民も百姓どももやろ
 る私ども殿様への市恩報と云儀の多かりはり速に焼成れと

むじそと我く去地の者もて少くは信長の案内よくおては彼不乃
 曲不水の勢ひ強く少くは去まは薬上室の傍に水浸してぬるけき
 む焼も腐く構ゆらんとはく罵り走めらるる民も百姓どももやろ
 る私ども殿様への市恩報と云儀の多かりはり速に焼成れと
 十倍のそり切して諸方の焼令く成れと是又依て陣中の難卒等
 去きふちこび汝等が働きよより速に出来軍中一日又安堵
 せりともて乃ちあつたは汝等雨中の陣中又滞海焼一併を引
 燒くははけよの歎ひるらんとはく罵り走めらるる民も百姓どももやろ
 る私ども殿様への市恩報と云儀の多かりはり速に焼成れと
 せぬ百姓ども殿様の市ありや何事の市用なりともおつとむる
 が市恩報焼の修造一因と私どもへ市まくせゆとて教多の百姓
 方へも分けて安堵積上げ彼不に薬き焼の律も見たりや



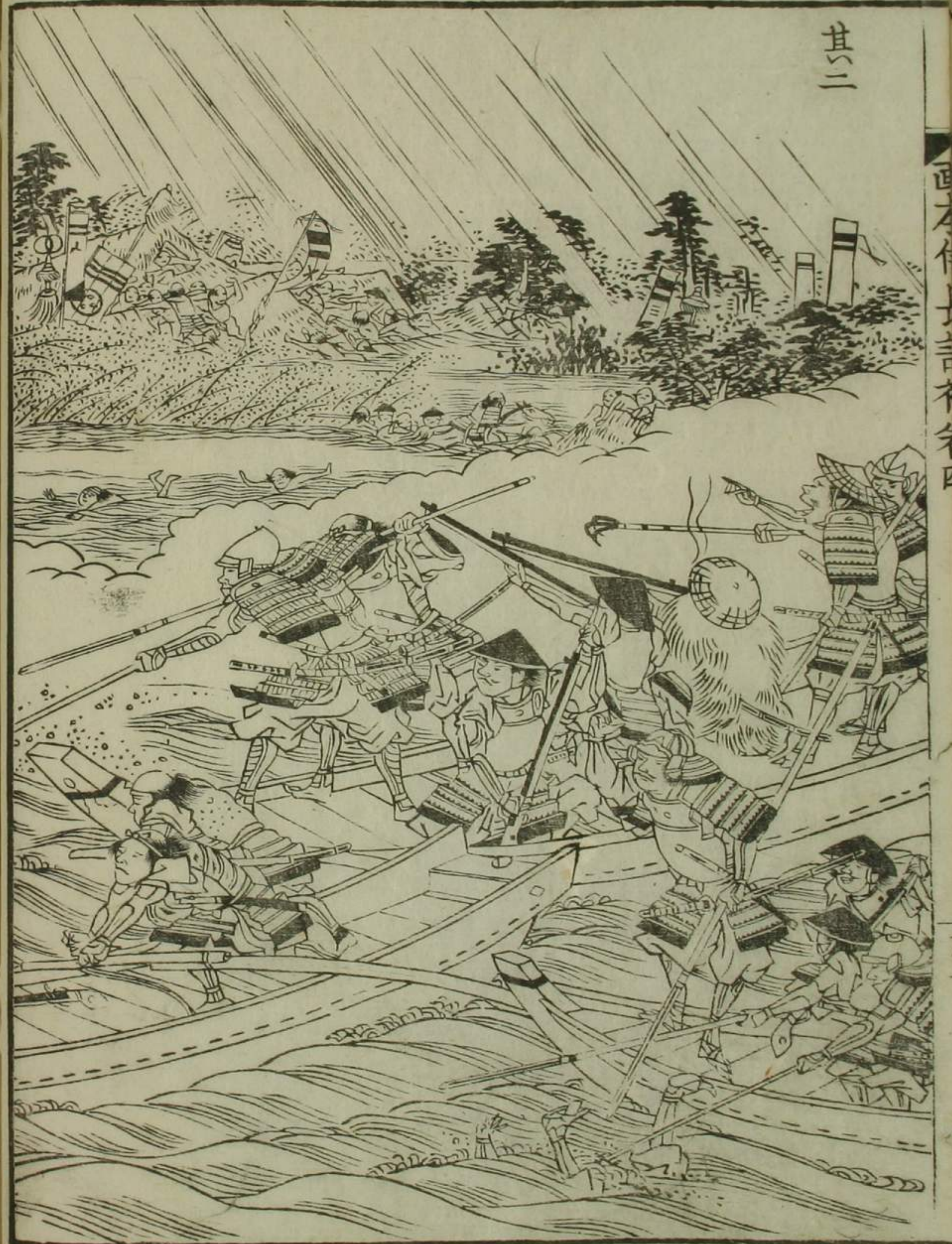
去舟
至幸
小田勢
と
あま
あま
子匠

日本信長記 卷四

九三

小田の兵卒敵方の計略と知りて皆一日と心と安んじ或る
 酒宴に或る舞ひ廻り其基双六の雨申の要と云ふに其夜に
 西の越むる兵士皆糧壘を松とし其後を知りて申する小田
 ありよと門後の百姓お國の鉄炮二ツ鳴らねどこそは方々分を
 敵する百姓ぞう藤上「境と二日と門と切崩せば堰止る洪水忽ち
 大浪とあて小田の陣くと激き後」只見る一斤の湖あところと
 後」より敵一かの軍兵驚きわいぐる水よ大あよ松と後とい
 りく夢水の音よあまり天地も震ふあさましと睡死する者数と
 知りて信長もこいふ小と驚き小るきあ人並よりは方向眼てま
 不に鈴木孫市志摩屋舟今舟中里が軍二十余艘の兵松と八方
 より押まはし蘇波と上げ鉄炮と放ちあけ狼狽する小田勢を切ま

討まさんぐよ難まりれば小田の大軍准一人防ぎまんとまられば乃
 らくあしき方と志し松松見だして逃げ復れ死傷の者数多人と
 とらふよりは「されども圍夜のするればお取守方の兵松も敵
 のあふれ見定めぐる只圍を作り鉄炮と鳴り」嘆き叫んで漕ぎ
 まま小田方と敵軍は肝をらり」環を矢ひ味方の兵士と敵と心
 得同士軍とありあり七烈もまは八擡も崩れ懸軍とて底の藤
 層とあがりくる舟とるる舟とるる舟の波に小田の勇兵は小田擡六
 即勝家重人の御身心えはしと楯の板と後とぬ」本陣目かけ推
 ぬるに本取守方志摩屋舟に即ち松と見智め鉄炮の竹と掃へ
 てあまる鉄丸一ツ勝家が壁をかこめく藤も負より柴田雷のまら
 懐夢を後し悪き己等小田の陣内よ空へうる鬼は小田方と令備





圖本傳異言補卷四



其ノ二
画本信長記初卷四

とはあつばやとのふぞとてんへしぐ服巻はるがう水中のあつとさび入
 歎乃船は諸ふとうけし引は水屋へ引入り何うのあつてたきふきとぬ
 志摩と伊郎とにじりし三十余人乃兵士悉く溺死し与伊郎り
 ずり水練を得ずりけふは急を滞りて味方乃船はあつりうり
 危き命令とたをうりうり耐ふ東の急向く難難き疾り既し明る
 とと凡が珍本孫市軍船を一本にまよふ勝間を上げく石山
 へ引さるるあつはしりりる働きなり

繪本信長記初巻終

